

平成28年度 まちづくり懇談会

北山地区会場の要旨

平成28年11月8日（火） 19:00～20:45

北山地区コミュニティセンター 参加者 86名

市長あいさつ

市長： みなさんこんばんは。冷たい雨が降ってまいりまして、一雨ごとに冬が近づいてくる、そんな季節になりました。また、昨日は、湯川バイパスの起工式が行われました。この湯川バイパスが北山地区の交通安全にとって、また、地域の活性化にとっていい道になる、そんなことを期待するところであります。また、福岡は地盤沈下で大変なことになっています。茅野ではあのようなことは起こらないと思っていますけれども、中国だけではなくて日本でも起こるのかと少し驚いているところでございます。本日は、雨で足元の悪い中、また一日のお仕事のお疲れの後、まちづくり懇談会に大勢ご出席いただきましてありがとうございます。今年のテーマは、「茅野市の未来予想図 大いに語ろう」ということで、10年後この北山地区が、また茅野市が、こんなまちになればいいな。そんなことをみなさんと語り合いたいと思いますので、忌憚のないご意見を出していただきたいというふうに思います。有意義な時間になりますことを願いまして、開会にあたりましてのあいさつとさせていただきます。

北山地区コミュニティ運営協議会会長あいさつ

北山地区コミュニティ運営協議会会長： みなさんこんばんは。お忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。北山地区運営協議会会長の村越でございます。本日のテーマまちづくり懇談会について、市長さんのお話を伺い、意見交換など有意義な懇談会になると思います。また、北山地区の課題やご意見なども出していただければと思います。北山地区コミュニティ運営協議会では、活動の上でこれからの10年を振り返り、これからの10年をどのように継続するか、という協議を行っていきたく思いますので、皆様のご意見を伺うこともあるかと思いますが、よろしく申し上げます。ありがとうございました。

—テーマと資料の説明 内容は宮川地区を参照—

意見交換

市民：最近ショックな事件があったのでお話ししたい。茅野市には、蓼科の奥のほうまで別荘がいっぱいある。通年にわたって住んでいる人は非常に少ない。その一角に1人暮

らしのおばあさんが暮らしていた。頑張って暮らしていたが、いよいよだめで、やっと説得をして、デイサービスを利用するよう話をした。デイサービスを頼んだところが、そんなに遠くまで行かれないと断られてしまった。今別荘に残っている方々は皆高齢で、自分で暮らすことができないような人たちが沢山出てきている。福祉もそこまで行ったらペイしない。市長さんから赤字を出すなど言われればそういうものだと思う。こうなると、自宅で最後まで面倒を見てあげたいと思っても、現実問題大赤字になるようなパターンを一体どうするのか。おそらくこういう事態は、まともに将来の事を考えている人がいれば、予測できたことだが、別荘をつくって、それ売れやれ売れとみんなが浮かれていた時代は、こういう時代が来るとは考えていなかったと思う。そのマイナスの面が出てきていて、そこに住んでいる人は福祉サービスも利用できない。医療サービスは、赤字でも私がいつでも行くから、私が働いている限りは何とかなるが、日常生活を支える福祉がそんな状況では。東京へ帰らない人たちを最後まで面倒を見るときに、いったいどういうふうにすればいいのかと思う。私は赤字でもやるべきだとは思いますが、そのへんをどう考えているのか。

市長：この界限一体に限らず、別荘に住まわれている永住者の皆さんをいろんな面でどう対応していくのかということの一つだと思う。確かに別荘を開発したころは、当時の若い人たちが対象で、その人たちが自分でもうけたという時代で別荘が開発された。今は、高齢になられて市民として定住されているという方がいろんな別荘地に多くいらっしゃる。その時代背景をどうとらえていくかということだと思う。開発事業者と市とで、そういった問題を含めて開発地の在り方を考え始めている。防災の面においてもいろいろな課題がある。今までは別荘地という括りだったが、これからは一つのコミュニティというかたちとして、市としても捉えていかなければいけない。これはなかなか難しい問題があって、簡単にこうだというわけにもいかないが、介護という形でいうと、国では、コンパクトシティという考えを打ち出している。できるだけ集めると、いろいろな手当てがしやすい。例えば高齢となった別荘の方を一か所に、集合住宅とか空き家活用でもいいが、例えば北部のサービスセンターの近くにそういう人たちがいてくれば、非常にやりやすい。そういうようなことも考えていかなければならないときが来るのではないかと思う。そうでなければ国が赤字補てんをしてやってそこに出向いてもらうということ。様々な面で大きい課題である。こうすればいいというご意見があればお聞かせ願いたい。

市民：昨年のテーマは「人口減少社会に立ち向かう」だった。人口減少の基本は出生率の問題だと思うが、社会的な増減をどう分析されているのか。その分析からこの未来予想図としたのか。未来予想図は結構夢のある感じでまとめているようにも見えるが。一番のキーポイントは、20代、30代、40代の子育て。茅野市で生活するということは、

働いて収入を得るといふ一番ベーシックな問題がある。諏訪エリアトータルで考えてい
いと思うが、そこで魅力のある働き場所があるというのがまず基本ではないかと思う。
その辺をどういふふうで考えているのか。大学との連携とあつたが、それがどれだけ機
能するのか疑問に思ふ。茅野市在住の中学、高校くらの世代の子に、将来どういふ仕
事がしたいのかとか、どこに住みたいのかとか、そういうところでアンケートをとつて
みると先が少し読めるのではないかと思ふし、人口の増減につながるヒントが出てくる
のではないかと思ふ。産業の衰退というのがあつたが、働くといふこと、茅野市で生活
するといふことは、茅野市でしっかり収入を得てそこで生活していくといふことがまず
ベースにあるので、茅野といふまちが単に教育や福祉といふ面でいくら充実していても、
生活ができなければ茅野市から出ていくといふことになる。その辺が将来を考えるうえ
でのキーポイントになるのではないかと思ふ。

市長：おっしゃるとおりすべての基本はどうやって食べていくのかといふことが原点だ
らうと思ふ。教育についても生きる力を育むといふこと、将来どうやって食べていくの
かといふことをきちんと授けていかなければいけないと思ふ。昨年の「人口減少に立ち
向かう」の中で、まず一番に挙げたのは、茅野市で働く、この圏域でいかに働く場所を
作っていくかといふことを第一に考えている。茅野市ばかりではなく、この諏訪圏域の
雇用の場といふことにあるかと思ふ。そういった意味で、公立化する諏訪東京理科大学
が与える影響は大きくなると思つている。大学を卒業してこの諏訪圏域に就職していく、
そういう構図を作っていかなければいけない。一番はものづくり、製造業になると思つ
が、それを想い描いている。魅力ある仕事があれば、出たまま帰つてこないといふの
も当たり前で、産業振興、雇用の場の創出にいかに取り組んでいくか、それが後でやる
観光を切り口としたまちづくりにもつながってくるし、非常に厳しい状況にあるがそれ
をどう連携させていくか、そこに最大限の知恵を絞っていかなければいけないと思ふ。
ポイントは、若い人たちがどうやって食べていけるかといふこと。諏訪圏域でも今は、
就職口はけっこうある。ただなかなか上場企業志向でこちらに帰つてこないといふのが
たくさんあると思ふ。企業は優秀な人材を求めている。そこにどうマッチングさせてい
くかといふこともある。それには親御さんの力もかなりあるかなと思ふ。若い人がいな
いといふが、自分のお子さんどうしているのかと聞いたら「東京に行って帰つてこない」
それを返つてこさせる教育もしていかなければいけないと思ふ。他力本願だけではだめ
で、自分の息子にこの諏訪圏はいいぞと。こういう企業がある、そこでお前は何をした
いのか。ただ単なるビッグネームのところだけに勤めるといふことが成功ではないと私
は思つている。そういったことも取り組んでいかなければいけない。

市民：魅力ある茅野市の考え方の中に、リタイアして年金で生活する、年金の収入に対
してプラスアルファで少し小遣いが稼げたらいい。あるいは茅野市に住んで充実した

生活が送れると、そういう視点で茅野市の魅力はそういうところで反映されているのかという気はしている。リタイアした人を都会から呼ぶという視点に据えて茅野市の魅力を作ることも当然あると思うし、そういうところに意識がいつているのかいないのか中途半端な気がする。それと、子育てして子どもを大学までだすとき、1人や2人でなく3人くらいの子を大学にやるといったら、やはりしっかりした収入がないとだめなので、そういうベースを諏訪エリア全体で連携を取って産業を育てていく、誘致していくということを諏訪圏全体でぜひ考えていってほしい。

市長：産業は特に茅野市だけというものではない。やはりこの圏域で考えていかなければいけないということで今取り組んでいる。どうやったらそこに若者が帰ってくるかといったらまずは働く場所。そこで食べていかなければいけない。それと教育も非常に大事だと思う。子どもを持っている若い母親の気持ちの中には、この圏域でどういう教育ができるか。ということに非常に関心が深い。そして、若い人たちにとっては福祉より医療。働く場所があってしっかり稼げて、いい教育ができて、医療がしっかりしている。簡単に言えば、若い人たちにとってはこの3つだろうと思う。そういう意味で教育にもしっかり力を入れていかなければいけないし、医師まで含めての医療、そういったところで中央病院も第3次のリニューアルがもうすぐ終わる。先生方の人材の確保に努めている。そういう中で企業をしっかりさせる。圏域ということなので、日赤との連携、あるいは高原病院との連携、岡谷市民病院との連携、こういった病病連携といった環境、これは、諏訪地方は割と恵まれていると思う。産業をしっかりさせて、いい教育の環境があり、企業がしっかりしている。やはり圏域でそれを作っていくということだろうと思う。

教育長：昨年の夏以来、茅野市の教育は良いからということで、東京あたりや県内から茅野市に住居を求めるといのがほんのわずかだが出てきている。茅野市の教育の良さがなかなか表に見えないところがあるが、表に見えるようにすることが一つの課題だが、更に充実させていきたい。

市民：最近流山市が人口増加しているという話がある。子育て世帯に対していろんな優遇策やユニークな施策をとっているらしい。参考に考えてほしい。教育は、特徴を出したユニークな教育を考えるといいのではないか。

市長：具体的にいうとどんな教育か。

市民：具体的にはなかなか難しいが、文科省の学習指導要領に沿ったということより、グローバルな形で活躍する人材を育てるにはどういう教育がいいのか。今格差社会が問

題となっているが、教育のこの辺のところから格差が出ていると思う。やはり、その上を志向できるような教育が大事では。高校も、県内には魅力ある高校がないということで、県外に行く高校生もいるみたいだが、全国には、いろんなバリエーションがあって特徴ある教育があるから参考にしてほしい。

市長：魅力ある学校がどういうものかという部分の議論もあるだろうが、ただ単純に進学校に行って有名大学に入ることが必ずしも人生の成功に結びつかないと思っている。生きる力を茅野市の教育では授けてやりたいというふうに思っている。どんな環境下でも生き抜く力を持った子供たちを育てていきたいと思っている。

教育長：一つはやはり生きる力、生き抜く力だと思う。長野県の場合、県外の流出が一時非常に多かったということで、清陵附属中学、清陵高校というシステムを作って県外の流出を防ぐという手を取ったが、その成果がいよいよ来年、再来年出てくる。もう一つ特徴ある教育というところで、縄文科が特徴ある教育となる。まだ十分整理されていないが、先人の生き方に込めた良さを学ぶということで、縄文時代が1万年続いたということの中にこれからの社会を作っていくヒントがある。生き方と同時に10年20年30年後の社会づくりの芽を子どもたちに育てていく教育となっている。外国の場合は縄文に学べということで、イギリスを中心としてかなり研究が進められてきている。その研究とほぼ合致する形で子どもたちに教育を進めていくということで縄文科をはじめている。まだこれが見える形になっていないので、見える化していくことが大事だと思う。全国各地の実践のさまざまなものを参考にして、より茅野市らしいものを求めていきたい。

市民：今年は、糸萱区に市長さん始め市からいろいろな支援をいただきありがとうございました。前回の北山区長会の中で、人口の問題が出た。糸萱区は80戸しかない。人口減少もあるが、平成23年の65才以上の高齢化率が33.5%だった。今年の4月1日の高齢化率が43.5%と、この5年間で若い人の流出により1割も上がってしまった。外に出ないよう若い人をお願いをして、糸萱区を背負って立っていただくようなことがあればいいと思うがそれも難しいような状況だ。北山小学校の生徒数は、平成23年には、171人いたが、平成28年4月1日には、120人。これだけ減ってきている中で、もっと若い保育園の方も減っていると思うが、今まで市の10か年計画や5か年計画で、周りの保育園がかなり新しくなっている。耐震設備の整った学校や新しい保育園で、伸び伸びと生活していると思う。北山保育園については、平成27年か28年に完成予定だと、5・6年くらい前に聞いたことがあるが、子供が少ないから少し延びるのか。耐震になっていないので、安全面を考えてほしい。

市長：保育園の建設は、耐震化ができてなく、建ててからそうとう経つので、耐震補強するよりも、全部建替えで行こうということで、前期計画と後期計画を立てた。前期の方で一番最後が宮川保育園で建替えが完了している。後期の第1番が北山保育園となっている。あと5つあって、北山、中大塩、小泉、みどりヶ丘など5つ。これが後期計画で建築順に建替えるということで計画したが、それでいくとここで出来上がるくらいのスケジュールだった。ちょうどこのタイミングで国の方から人口減少に対して公共施設そのものをどうしていくのか計画を作るよということになって、今中断をしている状況。今年度中にその計画ができて、それに基づいて保育園はどうしていく、小学校はどうしていく、コミュニティセンターも時期を向かえてくるのでどうしていくといった長期スパンの計画ができてくる。その中で言われている統合であったり、複合化であったりということも併せて考えていくことになる。例えば、市では統合は考えていないが、北山小学校と米沢小学校を一緒にして、一つの小学校にするとか、保育園を3つ一緒にして1つにするというような仕組み。あるいは、複合化ということで、この建替えのときに、北山小学校と北山保育園とこのコミュニティセンター、もしかしたらサービスセンターを含めて1つの建物の中にいくつかの機能を持たせるといったことも考えていかなければいけない。この複合化は茅野市でも取り入れていかなければいけないことだと思っている。そういったことも考える中で、どういう手当てをするかということで、今年度中に計画ができて29年度、来年度には北山保育園には手を付けていきたい。これがどういう形になるかは、今トータルの中で考えている。いずれにしても、市の公共施設で5つの保育園が耐震化できていない。このままほうっておくわけにもいかないので、北山保育園は、29年度から手を付けていくというような形になると思う。

市民：統合は考えずに、歩いて子どもの手を引いてという人もいるが、車で通勤前に送ってということがあるので、これ以上遠くなったらそれも大変なのでお願いしたい。今年区長を務めているが、平成8年に1回目をやった。我々の区は人がいないので、2回あるいは3回4回ということがあるかもしれない。平成8年から見ると区長職の仕事が非常に大変で、多くなっているように思う。配布はいいと思うが、会議などいろんなものが区長に来ている。区の中をまとめるとか作業などの本来の区長職の仕事がおろそかになっているかなと思う。区長に通知を出せばみんなやってくれるというのもどうかと思う。区長の仕事を減らしてもらって、市の方で背負えるものは背負ってもらって進めてもらったほうがいいと思う。人がいないというのは、会社の定年が以前は60才だったのが、今は65才となったため。それで、65歳を超えたところから若い人たちと一緒に区長職をやるのは非常に辛いと思う。できるところは女性の役員の登用をするよということだが、難しい。区議会もいいが、長をやるというのは難しいことがある。できるところはいいが、我々のところは不可能ではないかと思う。軽減してもらえればできそうな感じがしないでもないが、そこらへんの市長さんの考えを聞きたい。

市長：今、茅野市では、小学校の統合は考えていない。地域地域の特色を持ったコミュニティづくりをしていく核であってほしい。保育園も同じになる。市全体で見ると先ほどのコンパクト化からは逆行することになる。茅野市の1町8か村が一緒になった歴史がある。また、御柱のときは、北山という旗を立てる。300年後がどうなっているかはわからないが、少なくともこれから100年御柱は続くだろうし、その時にやはり北山という旗を立てなければいけない。その中心となるのは北山小学校だろうと思っている。そういった伝統を守っていくことが、またここに帰ってこようという一つの力になると思う。区長の役が多いということで、何年か前からまちづくり懇談会には出ている。今まで何でも区長さんと呼んでいたが、これはいいだろうといった見直しを順次進めてきている。そういった意味でひところり区長さんに声をかけるのは少なくなっているのではと思うが、地区の区長会長になると、それにプラスして若干ついてくるが、それは随時見直しをしていきたい。地区の区長会長会の中などで意見交換をしていきたい。区の中でも見直せるものは見直すということが必要になってくると思う。茅野市の区・自治会の運営は、けっこう金を使ってやっている。諏訪圏内でも岡谷などではそれほど予算は持っていないでやっている。茅野市独自の歴史もあるので、それをこれからどういうふうに変えていくかということも必要になってくると思う。

市民：区で、今年から高齢者支援のためのサロンを開設した。初めてのことなので、試行錯誤している。どのくらいの人が利用してくれるか心配がある。ここも70歳代、80歳代の方が農業をやっている。農業をやっていれば、サロンでゆっくりお茶を飲んだり、お友達と話をしたりはなかなかできないかもしれないが、子供は結構使っているようだ。これから農閑期になると余裕ができてくるかなと。菓子なり、お茶なりを持ち込んで、話をすればいいと思う。これも結局どこかで負担をしなくてはいけない。市に相談した時は聞く耳を持ってほしい。区で、兵庫県の藪市に研修に行ってきた。国家戦略の特区内で、中山間農業改革特区をやっている。面積は茅野市と同じだが人口が半分減ったという。試行錯誤をしながら農業をどう立て直したらいいかと一生懸命にやっているということで、市の職員から話を聞いてきた。すぐに取り入れるということではなくて、初めて聞く言葉で、日本でこんなことをやっているところがあるんだなとびっくりしながら帰ってきた。いろんな事業をやるときに規制緩和されるということだそう。規制が緩和されていけば、外からくる企業もあるかもしれないし、若い人も来るかもしれないので、人口減少の歯止めになるかもしれないので参考にさせていただきたい。

市長：前段の居場所づくりのモデルを糸萱区では先頭を切つていやっていただいている。市としても大変うれしく思う。全区・自治会にそういった場所を設置していければと思っている。運営に費用が掛かるということもあると思う。ぜひ相談してほしい。市と

してもこれに対しての取組はしっかりやっていきたいと思う。いい例として発展させてほしい。後段、いろんな面で戦略特区というのはある。あらゆる自治体が実情に合わせていろんな取組をやっている。茅野市でも、観光を切り口としたまちづくりを進めるために、国からの金を活用してこれを進める人材を15名ほど、今年と来年で採用していきたい。そうした人たちと観光まちづくりを進めていきたい。今は、観光は観光協会が中心になって観光を進めているが、観光協会は観光事業者の団体。それだけではなくもっと広い組織として推進機構というような形で、観光業者も当然メンバーになってもらうが、その他に農家の方であったり、商工会であったり、そういった人たちも入って観光地域づくりを進めていく。そんな段取りで進んでいる。その中心は高砂なので、また話を聞いてほしい。ほっとステイはその中の大きな取組になると思う。

市民：救護大会だが、災害の時に実際に役に立つのかと思う。三角巾の固定など、全く役に立たないという訳ではないが、実際に災害がおきたときにどうかと思う。団員全員が参加できる形で講習会などをしたらどうか。実際やっているのは分団の中で数名選んでやる形になっているので、それよりも全団員参加型で実際に山での搬送や水害の時など、消防署のプロの人を交えてやった方が、いざというときに役に立つと思う。救護大会は盛り上がっているが、仕事も抱えているし、家庭がある人もいる。その中で時間を割いてやるとなると大変。救護大会は訓練というより皆さんに見せるものとなっていると思う。

市長：消防団員がかなり参加してくれている地区もある。何か言いたいことがあるか聞いたときは何もなかったが、アンケートをまとめてみたら、消防団員の赤裸々な思いが書いてあった。いろいろな働き方がある中で、消防団をやってもらって頭が下がる思いだ。救護大会はどうするかというのは、分団長がいるので、分団長によく言ってもらって、団としてどうするかということになるろうかと思う。大会をやることで、1年間で関わる人間は限られているが、関わった人たちが増えてくるということで、救護の技術は上がってくるだろうと思う。実際災害に使えるかということは難しい問題。現場に行ったときに対応できるということになれば、よほど訓練を積んだ人間でなければなかなかできないだろうと思う。消防署員は訓練を積んでいるからできるが。消防団員だと躊躇してしまうという。しかし、その技術を持っていることで、絶対役に立つということはあると思う。そこらへんの思いと、実際団で活動する時間的なものは、団の中で議論してほしい。

市民：北山小学校からお寺まで下り坂がある。一応歩道と車道が区別されて、安全柵がついている。それは安全でいいのだが、溝の上に蓋をして、なんとか歩けるようにしたただけなので、小学生の通学にはまあまあ使えるかもしれない。ところがおばあちゃんが

ラクターを使うと、そこは走れない。柵があるために車道を走ることになる。とても坂が急で見通しが悪く、大型車両がしょっちゅう走る。せつかく歩車道を分けたのに、なぜ狭いのを作ったのか不思議に思いながら見ている。北山郵便局あたりの歩道は1.5メートルくらいあるためラクターも走れる。そこに比べて、ここだけまったく狭くて、小学生が通学に使えればいいやというような幅しかない。これからの歩車道分離は、お年寄りがラクターで走れることを考えた幅を作っていたかかないと将来的に無用の長物になっていきそうな気がする。これからのまちづくりには、そういうことに気を付けてほしい。できたら広げる余地があれば、ラクターで行き来しているおばあちゃんたちの安全をはかっていただけるとありがたい。

市長：そういう課題がたくさんあって、湯川バイパスというものができる。柏原からエコーラインにつながるということで、観光バス等はそちらを走るようになると思う。柏原ほどはのどかにはならないと思うが、こちらの道を使うのは基本的に地元の人たちになるかと思う。車道を走ってもそう危なくない環境ができてくるかと期待をしている。国の関係で完成までに4、5年かかる。しばらく交通安全には注意をしていただきたい。

—北山校長先生木遣り—

終了